

“ダイバーシティ”の推進力に！

東京都 八王子市立加住中学校 3年

瀬戸 秀一（せと しゅういち）

「夏の甲子園。」百回を記念する今年、全国から代表五十六校が出場し、連日、熱戦を繰り広げた。なかでも、秋田県立金足農業高校の快進撃と、校歌を一生懸命歌う姿は、投手の力投と相まって、大いに注目された。

そんななかで、私が最も注目したのは、高知商業高校の主将を務めた山中大河選手だ。山中選手の背番号は一〇番。レギュラーではない。主に三塁コーチとして選手たちを励ましつづけた彼が主将に選ばれたのは「部員の総意」と監督は語る。

山中選手の右手には親指と人差し指しかない。だから、ボールを投げるのもキャッチするのも、左手一本でおこなう。グラブを右肩と顎で挟んで投げるその技法は「グラブスイッチ」と呼ばれている。

かつて、米メジャーリーグには「グラブスイッチ」を操る投手がいた。一九八八年のソウル五輪で金メダルを獲得したほか、メジャー通算八十七勝をあげたジム・アボット氏。山中選手のプレースタイルは、アボット氏を参考にしているそう。

幼いころから、何度も何度も、限界を超えながら、身体と心を鍛えてきたのだろうと想像しながら、私は観ていた。山中選手のひたむきなプレーと三塁で仲間へ声をかけつづける姿に、私は胸が熱くなった。監督が語った「部員の総意」とは、きっと全魂を込めて野球に打ち込む山中選手の姿にあるし、自分との戦いのなかで培ってきた「人間力」によるのだろうと思う。

私の右手にも、山中選手と同じくハンディキャップがある。私の場合、親指が欠損していて、他の四本の指も曲げにくく、「物をつかむ」など握力を必要とする手の動きはできない。

そんな私にとって、山中選手は、私の目標とすべき人なのである。

私は今、中学三年生。来年の高校受験を控えている。将来への不安が無い、と言える、うそになる。

しかし、一筋の光が見えた。

昨年秋に、学校の授業で職場体験があり、私は、東日本旅客鉄道株式会社に行かせていただくことができた。

幼いころから鉄道路線図を覚えることが好きだった私にとって、夢の一つが叶った瞬間であった。

学校の先生のすすめで、履歴書にはハンディキャップがあることも記入し、将来の就職活動を思い描きながらの職場体験であった。

職場体験当日、JR八王子駅で私に仕事を体験させてくれた職員の方は、上肢機能障がいを持つ男性だった。ハンディキャップをもちながら職場の第一線で活躍する姿は、とても輝いてみえた。

そこで、“ダイバーシティ”という言葉を教えていただいた。

“ダイバーシティ”とは、多様な人材を活用し、それぞれの力が最大限発揮されることに、組織は留意するべきであるという考え方のことで、全て構成員が相互に、一人ひとりの持つ固有の特性、属性に敬意を払い、尊重し合うという精神が、その考え方の軸となっている。

JR東日本では、性別や年齢、国籍、障がいの有無にかかわらず、多様な人材がさまざまな業務において活躍しているようだ。

この“ダイバーシティ”の取り組みをしている企業について調べてみると、私が思ったより多くの企業が取り組んでいることがわかった。

私が就職する頃には、もっと多くの方が、この理念を理解し、実践する企業が増えていてほしいと思う。

この職場体験のおかげで私は、障がいをかかえていても障がいのない人と同じ仕事ができることを知り、一つの“希望”を見いだした。

“ダイバーシティ”というこの企業理念を推進していく一人になって、自分と同じくハンディキャップを持つ人が、職場の第一線で働ける環境が整っていくように貢献していきたいと思う。ハンディキャップを持つ人が、差別されない世の中を目指して――。